

(ABOUT)

TASCぎふとは？

アートで、まじわる。

取り組んでいること

岐阜県障がい者芸術文化支援センター〈通称：TASCぎふ〉は、ぎふ清流文化プラザを拠点として、障がいのある人を支える人とともに、アートの力を活用して、社会とまじわる場をつくり、育て、障がいのある人の表現と社会参加の可能性を広げることを目指して活動しています。一見、迷惑な行為や不快に感じることも、「おもしろい」に変換する、もしくは、「おもしろい」というフィルターを通して、日頃の行動や習慣を違う角度から捉え直すことで、分断された人と社会を繋ぐヒントとなるよう「TASC通信 特別版」として「まじわる」を発行しました。そして、何らかの役割や一つの特性に限定されるのではなく、ゆらぎのある関係性や開かれた社会について、みなさんと一緒に考えていければ幸いです。

「アートを通して、何ができるだろう？」そんなことを、自分に問いかけながら、多彩な表現者たちの作品に触れています。TASCぎふが取り組んでいることは、障がいのある人と社会をつなぐ「場」や「機会」をつくっていくこと。皆さまからのご要望や相談を元に、それらにお応えするかたちで、いろいろな事業を展開しています。

【展覧会・舞台】
ぎふ清流文化プラザや岐阜県内各地で作品鑑賞や発表の機会を創出

【オープンアトリエ】
月に数回、ぎふ清流文化プラザで自由に創作できる場を提供

【出張アトリエ・ワークショップ】
特別支援学校や施設など、要望に応じて出張アトリエなどを開催

【研修会・実践ワークショップ】
展覧会の企画参加や障がいの権利保護などを学ぶ場を提供

【アート利活用】
印刷物や日用品などへの作品の二次利用を推進

【相談】
障がいの文化芸術に関する相談を随時受付

(PRESENT)

「まじわる」の読者のみなさまに、
抽選でアート作品・製品をプレゼント!

※右記QRコードより「応募フォーム」へアクセスいただけます



応募締切 2021年4月30日(金)
応募方法 TASCぎふホームページ内、プレゼントコーナー応募フォームまたはハガキに
①「TASC通信」の感想 ②希望商品番号(A～D) ③氏名
④電話番号 ⑤郵便番号・住所を書いて、以下にお送りください。
送付先 / 〒502-0841 岐阜市学園町3丁目42番地 TASCぎふ プレゼント係 宛
当選発表 当選者への引換券の発送をもって代えさせていただきます。

※色や柄をお選びいただくことはできません。
※ご提供いただきました個人情報は、本企画の運営の目的以外で使用することはありません。

(SUPPORTER)

tomoniアートサポーター募集

障がいのある方の芸術文化活動を支援する「TASCぎふ」とともに、
展覧会の企画や鑑賞サポートなどに参加していただける方を募集(登録制)しています。
詳しくは、TASCぎふへお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

対象者 障がいの有無に関わらず、福祉やアートに興味のある方は、誰でも参加できます。
問合せ先 岐阜県障がい者芸術文化支援センター(TASCぎふ)
〒502-0841 岐阜市学園町3丁目42番地 ぎふ清流文化プラザ1F
(公財)岐阜県教育文化財団内
TEL (058) 233-5377 FAX (058) 233-5811
MAIL tasc-gifu@g-kyoubun.or.jp URL https://www.seiryu-plaza.jp/tasc/



[WEB]



発行日：2021年3月19日(金)
発行元：(公財)岐阜県教育文化財団 岐阜県障がい者芸術文化センター(TASCぎふ)
本紙掲載の記事・写真などの無断転載を禁じます。

表紙写真／「ふれ愛の家」にて撮影



岐阜県障がい者芸術文化支援センター
TASC通信 特別版
SPECIAL ISSUE
MAJIWARU

障がい者のアートを通して、
「おもしろい」を通して、
まじわるヒントを考える

まじわる

02 | 自由な生き様が、だれかの刺激に。
— 岐阜・池田町「ふれ愛の家」の日常から

04 | INTERVIEW
一本の線が紡ぐ、終わりなき世界。
ONE LINE ARTIST 曾良貞義

05 | 絵が心のバロメーター
丹羽まゆみ

06 | 凸凹工房が生み出す、
アートとクラフトのあいだ

07 | [座談会]
アートを通して、
障がいを越える、分断を越える。





自由な生き様が、だれかの刺激に。 ― 岐阜・池田町「ふれ愛の家」の日常から

山々に囲まれたのどかな風景の中にある「ふれ愛の家」。
ここでは、障がいや難病のある方が生活のサポートを受けながら、
下請け作業や表現活動などを行っている。
一人ひとりの個性を見い出し、尊重する「ふれ愛の家」の日常から、何を感じるだろうか。

混沌の中にも、秩序がある

なぜだろう。“混沌”としているのに、“混乱”はしていない。夢中になって画用紙にクレヨンで絵を描く人、真剣な表情でドローンを操縦する人、黙ってじっと座る人、言葉にならない声を発し何かをしきりに訴える人。岐阜県西部、揖斐郡池田町にある池田町障害福祉サービス事業所「ふれ愛の家」の日常は極めて自由だ。利用者はそれぞれ思い思いの時間を過ごしていて、その光景は一見するととりとめのない時間が複雑に交錯し、入り乱れているかのようだ。しかし、その場に少しの時間身を置けば、決して乱れておらず、むしろ秩序があることが感じられる。それは何らかのルールや規則に縛られたものではなく、全員が自由であることから生まれる緩やかな一体感。言い換えれば、「自由であること」がこの場所の唯一のルールなのかもしれない。同じ空間に様々な利用者の自由が重

なり流れる時間はとても穏やかだ。
今でこそ、一人ひとりの自由を何よりも尊重するふれ愛の家だが、一時はいかに作業効率を上げ、工賃を向上させるかを重視していたこともあった。物を置く場所や作業の際に座る位置を決め、スムーズに作業が回るよう徹底的に管理をした。作業に気が向かない人がいれば厳しく指導をした。その結果、工賃は上がったが、だれも幸せそうではなかったという。もっと大幅に工賃が向上すれば、幸せな未来が待っているのかもしれない。しかし、本当に幸せになれるか分らない道のりで、みんなが苦しい思いをしなくてはならないのであれば、たとえ作業効率は下がったとしても、今も将来も楽しい道を選んだ方がいい。座りたい場所に座って、作業をしたくないときはやらなくていい、踊りたい人はいつでも踊ればいい。ありのままで居られる自分の居場所を作ろう。「ふれ愛の家」の自由はこうして生まれた。

障がいがあるからこそできる、 個性的で自由な生き方

自由とはいえ、それはただ放っておくことではない。個性豊かな人々が共存するなかで、みんなが自由であることは非常に難しい。だれかの自由が他者の自由を妨げることがあるかもしれない。そもそもやりたいことが見つからない人もいる。「ふれ愛の家」では、利用者が普段どんなことが好きで、何に夢中になるのか、日常生活の中から一人ひとりの特性に気付くことを大切にしている。障がいがあることで、わたしたちの常識を越える行動ができた、自由な発想から思いもよらない表現が生まれることがある。彼らの個性的で自由な生き様は、見ている人に驚きや感動、新しい発見を与えてくれるのだ。そんな彼らの生き様をダンスや音楽などのパフォーマンスを通してもっと多くの人に届けられな

FRIENDS OF “FUREAI-NO-IE”

ふれ愛の家の 仲間たち

個性豊かな35人が通っているふれ愛の家。
ユニークなパフォーマンスでみんなを楽しませる
仲間たちをご紹介します！



安藤佑真さん

どんな悩みにも真摯に向き合う、
お悩み相談のスペシャリスト。
地球を救うための物語を記録する
「伝説ノート」を毎日書き続けている。

河村りつ子さん

あふれんばかりの笑顔がチャームポイント。
日々おんなのこの絵を描き続け、
自室には110枚ものイラストがずらり。

森田尚吾さん

独特の重ね着センスを持つ
ファッションリーダー！
カラフルでどこか
ユーモラスな“鬼”の
イラストを描く。

山田正人さん

だれにでもフレンドリーな
優しい心の持ち主。
リズムカルにけん玉を操り、
難易度の高い技もお手の物！

大場 峻さん

綿棒で立体物をつくる“綿棒アート”を
応用して自作したドローンを器用に操縦。
人やものを避けながら絶妙なバランスでコントロールする。

いかと、2014年「ふれ愛の家」では施設を飛び出してパフォーマンス活動をスタート。岐阜県内の道の駅でのイベント出店の際に、突然音楽を流してダンスを踊り、投げ銭を集めたのが始まりだ。しかし、当時は障がい者によるアートやパフォーマンスに対する理解が浅く、「障がい者を見せ物にしている」「投げ銭を集めるなんてみっともない」と利用者の保護者やお客さんの一部からも意見があった。それでも、パフォーマンスを通して表現される、障がいのある人たちの自由な生き様は人々に刺激を与えると信じて、ふれ愛の家は試行錯誤を重ね活動を続けた。

他者の日常をおもしろがること

利用者の好きなことや、こだわりを見つけたら、それを一般の人にどう伝えればおもしろく映るのか、表現方法を変えたり、言語化をして、ステージで

ダンスや演奏、歌などで表現する。ステージ上の利用者と、観客両方の反応を見ながら、利用者の「好きなこと・やりたいこと」と観客が「おもしろがること」の釣り合いが取れる表現方法を模索する。その繰り返しだ。そして、パフォーマンスと言っても、ステージ発表のために作り込まれたプログラムではなく、あくまでも日常を切り取り、自然体のまま表現することを大切にしている。利用者にとっては当たり前のことや、ただ好きで夢中になっていることが、他のだれかの救いになったり、おもしろがって見てもらえることにより、一人ひとりに役割が生まれ、利用者がより個性を発揮し自由に生きることができる。これほどまでに幸せな循環が社会にはあるだろうか。「ふれ愛の家」が目指すのは、施設の中で生まれたこうした幸せの循環を、社会にも広げていくことだ。「ふれ愛の家」では、来客があれば握手やハグで歓迎する。障がいがあるかないかは全く問題で

はなく、だれにでも寛容な空気が流れている。突飛な行動や常識から外れた習慣は人を驚かせるかもしれないが、他者を傷つけたり、いがみ合うことはない。施設の中ではみんなが幸せそうに生きている。だれかが奇抜な行動や発言をしたとしても、それを常識に基づいた「良い」「悪い」で判断するのではなく、新しい文化としてそこから学びを得ることができれば、彼ら一人ひとりが生き方の手本に見えてくるだろう。その姿勢は、障がいのあるなしに関わらず、社会の一員としてわたしたちが自由に、幸せに生きるための道標だ。

池田町障害福祉サービス事業所「ふれ愛の家」
住所／岐阜県揖斐郡池田町下東野18-8
電話／0585-44-1877



ONE LINE ARTIST
曾良貞義
SORA Sadayoshi

一本の線が紡ぐ、終わりなき世界。

立体感のある幾何学模様や動物、果物。

図形の内側は迷路のように緻密に線が張り巡らされ、驚くことに、その線を起点から辿ると、再び同じ点に戻ってきます。

ONE LINE ARTISTの曾良貞義さんが描く作品は、一本の線によって描かれているのです。

「絵を描く」という能力が
脳内にダウンロードされた感覚

双極性障がいと診断されて、気分の浮き沈みが激しく悩んでいたある日のこと、突然紙とペンが持ちなくなったんです。自宅の机にノートを広げて、ぐちゃぐちゃと書き殴る様にペンを動かしました。そうしたら、急に頭の中に映像が浮かんできて。「絵を描く」という能力が脳内にダウンロードされた感覚でした。でも、当時はまだ脳と身体が繋がっていない感覚があって、これはひたすら描いて上手くならないといけないという衝動に駆られ、とにかく絵を描き続けました。そうしたら、それまで感じていた不安が消えましたね。自分はただひたすら絵を描いていればいいんだと。とても心が楽になって、「自分にはこれしかない」という自信に満ち溢れた気持ちでした。

練習すればきれいな絵が描ける
ビジョンははっきりと見えていた

最初は作品と呼べるような絵ではなかったのですが、妻や周りの人は「この人何やってんだらう？」という反応でした。それでも、練習すればきれいな絵が描けるようになるビジョンははっきりと見えていたんです。アートには無縁だったのに不思議ですね。3年ほどで、自分でもびっくりするくらい細かい絵が描けるようになってきて、その頃から作品として展示や販売もするようになりました。絵には無限の可能性を感じていて、続けていけば何でも描け

るという自信があり、迷いはありませんでした。もう修行ですね。描きためた絵が100枚くらいになると、周りの人もアーティストだと認めてくれて。ただ、唯一の不安はお金で、それだけが今もしんどいです。自分には絵しかないけど、アーティストとして生計が立てられるなんてことはなかなかない。今後、どうしても超えたいところです。

自分の内側から湧いてきたものを
作品にしたときに個性が生まれる

描く時は、片手でスマホをいじりながらとか、テレビを見ながらとかですよ(笑)。身体が勝手に動くことが多いですね。オートモードという感じです。真剣にやりすぎると手が壊れてしまうので、集中しすぎないくらいがちょうどいいですね。本当だったら真剣にガーッと描きたいんですけど、筆圧が結構高いので、疲れちゃうんです。そして、他人の真似事はないというのは大事にしています。外からの情報ではなく、自分の内側から湧いてきたものを作品にしたときに個性が生まれるんだと理解しています。1、2年前は自分のことをこうして話すことはできなかった。でも、こうして言語化できるようになったのは大きな変化だと思います。

絵と自分が
一緒に進化している感覚

絵を見てくれた人にびっくりしてもらえると嬉し



いですね。自分自身もびっくりするくらいだから、見ている人はすごく驚いてくれるんです。でも、自分は絵を描き終わると描いた作品に対しては全然執着がないんです。昔はこれに残しておきたいという気持ちがあったんですけど、今は全然ない。今ある作品が手元からなくなれば、また新しく出発できるので、手放した方がおもしろい。今に執着すると進化できないので。絵と自分が一緒に進化している感覚です。自分にとって絵を描くことは遊びだけど、その中に成長があるというか、今もまだ成長できていると思っています。ゴールの見えなさやまだまだ先へいけるというところに惹かれるんでしょうね。

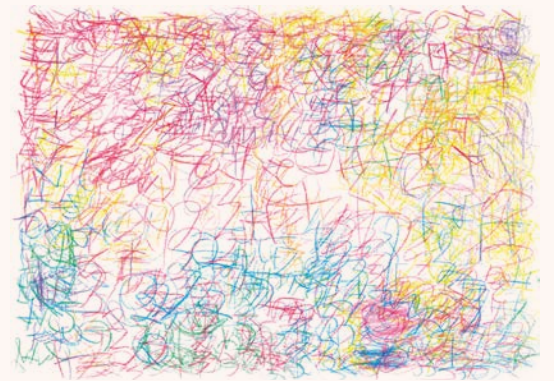
自分を好きになると
周りの人も好きになれる

病気になってから自分を見つめる時間は増えました。自分自身と会話し続けることで、最終

的には自分のことが大好きになりました。絵を描き始める前は、職場で周りの人が当たり前に行っていることが、なぜ自分ではできないんだと自己否定をしていましたが、絵が認められることで自分自身も認められているような気がして。苦手なことがあるという部分も含めて自分を好きになることができました。自分を好きになると周りの人も好きになれるんです。反対に自分のことが嫌いだと、他人を好きになったり、共存することができない。大事なことを絵が教えてくれたような気がしますね。

曾良貞義 そら・さだよし
1976年愛知県出身。岐阜県下呂市在住。2012年に双極性障がいと診断され、ある日自分が衝動的にノートに描きながら絵を見た瞬間、それが進化しながら迫って来る未来の絵のビジョンが脳内に降りて来て、突如絵を描き始める。現在はシャープペンシルやカラーボールペンを使用して、始まりと終わりが一本の線であつなかる「ONE LINE ART」を制作するアーティストとして活動中。

え ころ 絵が心のバロメーター 丹羽まゆみ NIWA Mayumi



赤やピンク、黄色、春のような淡い色使いの作品。黒や紫をベースにしたダークな世界観の作品。対照的な2つの作品には、どちらにも「ちゅーりっぷ」が咲いています。絵の作者は丹羽まゆみさん。岐阜県各務原市にある複合福祉施設「福祉の里あすなろ」に通いながら、施設の作業時間に1日1枚、色鉛筆やクレヨンで絵を描いています。マイペースでのんびりとした性格の丹羽さん。施設での集団行動では周りから一歩遅れたり、決まった作業に取りかかれなかったことがあるものの、絵を描かない日はありません。

「最初は私も本人も芸術だとは思っていませんでした。絵を描いては本人が細かくちぎってしまったりしててね。でも、描いている絵を作品として認めてもらい、展示されたことによって、自然と絵をちぎらなくなって、絵を描くことへのモチベーションも明らかに高まりました」。そう話すのは長年丹羽さんの支援員としてサポートしている長谷川昌代さんです。通所し始めた頃、ソファに描いた絵は「落書き」だったけれど、1枚の紙に描き額装されることにより「作品」になる。展示会場で自分の作品を見た丹羽さんは「私の絵!」と胸を弾ませました。絵を描くことへのモチベーションは施設での仕事にも表れ、少しでも長く絵を描けるように、仕事を早く終わらせようとする時期もありました。周りの環境や人からの影響に気持ちが左右されやすい性格だからこそ、絵に対する周りの反応が伝わったのではないかと長谷川さんは振り返ります。

昨年、施設では新型コロナウイルスの影響を受けて、作業時間の短縮を余儀なくされました。すると、丹羽さんの様子に変化が表れ始めます。もともと作業に没頭すると次の作業に移ることが難しいことが多かった丹羽さんですが、目の前のことに対する執着がなくなり、あっさりと作業をやめてしまうことが目立ちました。自分の世界に入ることも増え、長谷川さんが声を掛けても耳に入らないことも。その頃の絵には元気がなく、トレードマークである「ちゅーりっぷ」は小さくなり、文字中心の作品が多く見られるようになりました。「まゆみさんには絵を描く時間がとても大切なんです。もっと自由に絵を描く時間を取ってあげたいのですが、コロナによってそれができないのがもどかしいですね」。現在、丹羽さんは少しずつ生活と作業のペースを取り戻し始め、絵にも再び元気な「ちゅーりっぷ」が咲き始めています。



丹羽まゆみ にわ・まゆみ
1971年生まれ。各務原市在住。各務原市福祉の里あすなろ所属。2019年より「tomonアートフェスティバル 花さき、誇れ!」「多様な有りよう展 in おおがき」などの展覧会に作品を多数出展。



ユニークなモチーフと配色が目を引き、ポーチやサコッシュ、トートバック。凸凹工房が手がける革製品はすべて世界に一つだけのオリジナルだ。凸凹工房は「岐阜市社会福祉事業団ワークサポートみやこ」でアート活動をするグループ。現在は5人のメンバーが支援員の川上宏二さんのサポートのもと、1週間に2、3個のペースで革製品を制作している。今ではお客さんからのオーダーを受けることも珍しくないが、独自のデザインを生むまでには長い年月がかかったという。障がいの有無に関わらず、世の中に革作家が溢れているなかで、凸凹工房にしかできない唯一無二のものづくりとは何なのか。週末、岐阜市内で開催されるマルシェに出店してお客さんの反応を見て試行錯誤を重ねた。時には一つも売れずに途方に暮れることも。メンバーがつくりたいものと売れるものにはギャップがあり、川上さんと凸凹工房のメンバーが互いに理解し合うには、対話と時間が必要だった。「障がいがあるからこそできる表現がある」。川上さんがそう気がついたのは意外にも最近のことだ。マルシェに立ち寄ったお客さんが、その場では手に取らなくても、どうしても忘れられないと後日注文を

してくれる。売れなくても「いいやん!」と声を掛けてもらえることもある。革の傷や破れを取って中央に配置したり、糸の色を途中で変化させるなど、固定観念に捉われないからこそ生まれる自由なデザインが人の心を掴む。革製品としての精度の高さや実用性以上に、凸凹工房のメンバーにしかできないものづくりが人の心を揺さぶる。たとえ100人に1人の心だとしても、その事実が凸凹工房がものづくりを続ける意味となった。デザイン画を描く工程から、縫製までをすべて手作業で制作している凸凹工房。完成品を「商品」と呼ぶのが相応しいのか、「作品」と呼ぶべきか。凸凹工房はそのどちらでもない“アートクラフト”と定義する。障がいのある人がつくったから価値があるのではなく、障がいがあるからこそ生み出された表現に、障がいのない人が本当の意味で心動かされ、お金を払ってそれを購入する。凸凹工房は、障がいのある人がアートを通して社会と触れ合うとき、共生社会の実現に一步近づくと信じている。コロナによる自粛生活が明け、再び人と出会い、アートクラフトを届けられる日々が戻ってくることを凸凹工房は願ってやまない。



①凸凹工房のメンバー。写真左奥から支援員の川上宏二さん、桂尚美さん、伊藤一輝さん、篠田慎昌さん、澤部隆昌さん。②昆虫のイラストを描くのが得意な伊藤一輝さんのイラストを製品化。凸凹工房ではメンバーの得意分野をものづくりに活かしている。③野村江梨香さんのトートバッグは材料の革の穴を活かして製品のポイントに。革と革の間に発泡スチロールを入れることで立体感を表現。

社会福祉法人 岐阜市社会福祉事業団 ワークサポートみやこ
住所／岐阜県岐阜市都通2-23（岐阜市福祉健康センター2階）
電話／058-252-4737

革製品ができるまで

1 デザイン案を描く



ノートに書き溜めているデザイン案の中から、川上さんと話し合いながら、実際に製品化する案をセレクト。デザインは生き物をモチーフにしているものから、幾何学模様まで様々。

2 パーツの型を取る



デザイン案を厚紙に写して型を制作。革の色や、傷や穴の場所を見ながら使う革を選んでパーツごとに型を取る。デザイン案は白黒のため、この工程で配色が決まる。

3 縫い穴をあける



革は厚く、針を通すことができないため、縫い合わせる革を並べて、菱目打ちと呼ばれる道具とハンマーで縫い穴を開ける。この工程でようやく完成形が見えてくる。

4 縫製



一針一針、手縫いで縫い合わせる。糸目をそろえるためには高い技術が必要で、初心者では端切れを使って練習を重ねる。糸の色も様々で、製品によっては途中で色を変えてアクセントにすることもある。

5 完成!



完成した革製品はイベントや雑貨店で販売するほか、オーダーメイドも受け付けている。

座談会

アートを通して、障がいを越える、分断を越える。



安田香実 やすだ・かぐみ

TASCぎふアートサポーター。長年、未就学児を中心とする障がい児支援に従事し、現在は各務原市内の福祉施設に勤務。言語聴覚士として吃音の子どもの支援に力を入れる。



河合千尋 かわい・ちひろ

岐阜市内で健康マッサージ「河合治療院」を経営。生まれつき視覚に障がいがある。音楽をこよなく愛し、観賞するだけでなく、ピアノの演奏や歌を唄う。2018年TASCぎふ開所式にて歌を披露した。



豊富春菜 とよみ・はるな

美術家。写真をもとにした絵画作品を多数発表。TASCぎふの活動に参画し、オープンアトリエや幼稚園での絵画教室にも携わる。

豊富 私はTASCぎふの仕事に関わるまで、福祉の分野について無知でした。ここで障がいのある方々の創作活動支援の仕事始めて、非常に多数の福祉施設があることに驚いたんです。私自身が無関心だったというだけでなく、そもそも社会的に障がい者が分けられてきたということを感じました。

ないかと思っています。

安田 本当にそう思います。これまでTASCぎふの活動を通して、障がいのある方の色々な作品に出会ったけれど、すごく表現にパワーがある。作品の**パワー**に触れると、作者がどんな人なのか知riなくなるんですよ。

安田 近年、ダイバーシティという言葉がよく使われているように、障がい者だけではなくて少数派の方々による情報発信が増えてきて、昔に比べたら福祉の世界のことは知っている人は増えたような気はします。でも、福祉従事者としての立場から見れば、障がい者が社会的に認められているかという、まだまだです。社会的な分断は国籍やLGBTQ、認知症、貧困など、障がいだけの問題ではないですよ。

河合 障がいのある人となない人の分断があるなかで、本当に優れたアーティストというのは障がいを越えてしまいます。ピアニストの辻井伸行さんが世界的なコンクールで優勝したのは、目が見えないからではありません。スティーヴィー・ワンダーも目が見えないから尊敬されているわけではなく、彼の真摯な態度が尊敬されているのです。われわれ障がい者が、障がい者であることを忘れさせるようなパワーを持たないといけないんじゃないかと

豊富 パワーがある作品に出会ったときに感動するし、優れた作品や作家を尊敬します。ただ、優れた才能だけが評価されるのではないアートとの関わり方も大切に感じています。例えばオープンアトリエや施設で出会う方の中には夢中になって絵を描く方がいます。好きなことにのめり込み、目的や役割を超えたところでそれを楽しみつくすというのは、制作する喜びを分かち合い、その過程や作品として形になったときにお互いの存在に共鳴できるし、その共鳴が障がいのあるなしを超える力になるのではないのでしょうか。健常と呼ばれる人たちが共鳴できるアンテナを持っているかどうか…。もしそういうアンテナが退化してしまっているとしたら、それを取り戻せるかどうかという、見る側の問題でもありますよね。

河合 目の見えない僕からすると、健常者の方にはもっと聴覚を養ってほしいと思います。どういうトーンでどの部分の語気が強いのかというニュアンスをよく

聞いていくと真意が分かるんです。

豊富 アートはそもそも役に立つか立たないか分からないという、そういうところに私は魅力を感じています。例えば子どもが大胆にうわつと絵を描いて、紙でないものに描いたとき、「どうしてこんなに汚しちゃうの」と言う親御さんがいるけれど、紙以外のものに描いてはいけないという無意識のうちにほめてしまっている“枠”があります。この“枠”を外すことがアートにはできていると思っています。私自身、アートを介した障がいのある方々との交流の中で、自分の中の“枠”に気づいたり考えたりすることはとても大切な経験です。

安田 私も自分の凝り固まった概念や価値観を外していくことが大切だと常々感じています。芸術はノンバーバルですよ。例えば音楽だと響きやリズムでコミュニケーションができます。「トントン」って叩くと「トン」って返すとか、言葉ではキャッチボールできない人が音でならコミュニケーションが取れるということがあって、普段と全然違う姿が出てくるんですよ。

豊富 芸術を通して社会的な分断を越えてコミュニケーションが取れたり、共鳴し合える一方で、誰もがインターネットを通して情報にアクセスできることに

て社会的な分断ができてしまっていると思います。インターネットは自分が欲しい情報だけがどんどん集まってくるようなシステムだから、どうしても偏った情報になってしまうですね。それをどう越えて、まじわるのか…私にはまだ答えは見つかっていません。

河合 僕は映画が好きで、よくガイドヘルパーさんと映画を観に行きます。映画を観て何が楽しいかという、見える人に分からないシーンを足してもらうことです。もちろんその人の感性や思い込みもあるんですけど、ストーリーが足されていくことがおもしろい。セリフのないシーンはたくさんあるので、話を聞くことで、そういうことだったのかと確認するのがおもしろくて映画を観ます。障がい者が社会にまじわっていくことや、健常者とのつながりはそういうところかなと思います。

安田 私もまさにそういうことだと思っています。TASCぎふのアートサポーター活動を通して、対話型鑑賞法を知りました。自分と違う視点を持っている人の作品の捉え方に触れることで、自分の作品の捉え方が広がって、アートをもっと深く味わえる。そういうときに、表現した人や一緒に鑑賞をした人たちとつながったと感じます。